

続・家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第5回

団士郎

ここしばらく家族の記録と記憶のことを考えている。2018年は3月に中国・満州ハルビンに行った。731部隊の物語を見た。そして9月にはポーランド/アウシュヴィッツに行った。たくさん聞かされたホロコーストの舞台になった強制収容所に立った。そしてベルリンで、犠牲になったユダヤ人の様々な痕跡を訪ねた。それは、歴史の中にある家族の物語に触れる機会を増やしたいと思ったからだ。

今を生きる家族には、私自身のことも含めて数多く会っている。未来の家族は想像力の中しか会うことは出来ない。しかし過去の家族の物語に出会うのは、そんなに難しいことではない。大きな歴史や大きな物語に一括りにまとめてしまわなければ、「たくさんの小さな証拠を残した過去」になって世界中に散らばっている。

それらは世界史にも日本史にも繋がっていて、日々どんどん消えていく。記憶も記録もそういうもので、痕跡の残されたものだけを、後の時代の人間がたどることが出来る。

しかしそうすると、起こった事故や事件の記録や記憶に偏ってしまうことになる。起きなかったこと、起こさずにしのいできた家族のたくさんの物語は残らない。それを掘り起こしたり、隙間を埋めたりするのは想像力だ。

私の今の関心事は、そんな世界の物語と、私自身のファミリーヒストリーの連結だ。何かを起こした他者の大きな物語ではなく、私自身の物語への旅が始まっている。



世代間境界

家族の中にも境界は存在する。親がいて子どもがいる場合、世代間境界が親子の間に成立していなければならない。三世代の家族をみた場合、祖父母と両親の間に一つ、両親と子ども達の間の一つの、二つの世代間境界ラインが引かれていることになる。

これは比較的目に見えやすい境界である。二世帯同居住宅などの場合、共用部分と、プライベート部分のあり方などで観察することができる。

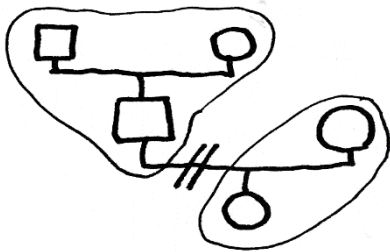
夫の帰宅が遅いから、二人の子ども達と一緒に寝ていると語った母親には、いつ子ども達と寝室を別にすることがテーマになった。

来談目的は子どもの不登校相談だったが、整理すべき事は学校問題だけとは限らない。「不登校と、どう関係があるのですか？」と不審顔だったが、弟の小学校卒業を機に子ども達と両親の寝室を分けた。

それで直ぐ、登校したわけではないし、それが他のことにどう影響したかも因果のように明確なことは言えない。だが、世代間境界問題の整理とはこういう事である。そしてその影響を、間違いなく家族は受けることになる。

家族（５） 母と娘

小学五年生の女子。訴えは母親への暴言、時に暴力とのことだった。



つぎつぎと無理な要求して、聞き入れられないと、物を壊したり、あばれて母親にも暴力をふるう。こんな状況がエスカレートしてきているという。

母子はある事情で最近、地方都市のアパートに転居してきたばかりだった。新しく始まった生活に、母親も心細かったのだろう。何かにつけて娘に相談をもちかけた。それまでなら母親が父親と相談して決めて伝えていた事も、娘

と相談するようになっていた。

その結果、娘はだんだん自分の意見が交渉次第で通ると思うようになっていった。やがて始まった法外な娘の要求、そして聞き入れられないと始まる家庭内暴力。「どうしたらいいんでしょう先生、あの子を何とかして下さい」という相談だった。

こんな風に、母親のすることにいちいち口を挟むようになったのは、二人暮らしを始めてからのことだ。それまでは成立していた思いとどまる境界線が、母子の間でなし崩しになってきてしまっていた。



何ごとによらず娘の意見を求めるようになった母。すべてに交渉の余地があるような対応をされることで、自分の要求や迷いをどこまで表わしてよいのか、混乱気味の娘。「どうしましょう、どうしたらいいんでしょう」と訴える母親に、「結果の正しさよりも、お母さんが自分で決めて、

それを貫くことの方が、子どもはずっと落ち着けるのです」と伝えた。

母子生活に至る経過には、複雑な事情があった。現状もやむを得ないかと思わせる人間関係もあった。しかし母子がこれから暮らしていくのに大切なのは過去ではなく、現在であり未来だ。今後の生活が、少しでも円滑に運ぶための知恵を身につける必要があると考えて、こういう方針を採った。

ここに見られるのは、母子二人だから何でもよく相談してという勘違いの話し合い親子の世代

間境界の崩れである。そして一人親になった人の弱気による、結果責任の放棄である。

更にこのケースでは面接経過中に、別れた夫が夜にアパートを訪れる事態が起きた。子どもを美味しい肉を食べさせるレストランに連れて行ってやりたいというものだった。母親は娘に「どうする？」と問いかけ、急に言われて、どう返事してよいかも分からなかった娘は一人、父親についていった。この後、しばしばこういうことが繰り返されることになった。

このエピソードなども、境界の侵入されやすさの典型だ。どう対応するのが正しいかにこだわって、躊躇している間に押し切られるというのがパターンである。

相続から見える親子の境界

世代間境界の線引きが出来ている子ども世代は、高齢化する親の介護問題を、兄弟姉妹間の課題として話し合うことができる。しかし特定の誰かが親世代と格別に近しく、そこだけ親子の境界が曖昧な場合、しばしば事態は混乱する。

親世代から子ども達への家族内情報の伝達量に兄弟姉妹間で差が生じたり、秘密や金品の不公平な授受があったりすると、話し合うのは難しくなる。

家意識の強い時代の家族における長子相続は、有無を言わせない結論が支配して機能していた。法律もそれを支持していた。しかし現在、子どもの数が減っているとはいえ一人っ子ではない家族において、老親との関わりに端を発した、同胞のトラブルを抱えた家族は少なくない。ここに多くの場合、世代間境界の設定トラブルが見られる。

介護問題はいつも、①誰がすべきか（義務・責任）、②誰が出来るか（能力）、③誰がしたいか／誰にして欲しいか（感情）の三つがせめぎ合う。

①は昔からある、長男、長子が・・・という考え方の名残。今や法的な根拠はないから、それまでの生活歴を背景にした習慣のようなものだ。そして実態はしばしば、分割の難しい不動産の相続問題と絡んで対応されていたりする。

②は見解ではなく現実として存在する。経済的に無理、地理的に不可能、世話できる人手がない、そんな事情はどこにもある。

そして③がある意味で一番やっかいだ。人は助けてもらう時にも注文を出す。カウンセリングの仕事をしていると、技術や知識とは別に、相性や好みの存在を無視できない。

外科医のような技術なら、人柄や相手との関係は考慮する必要は少ない。上手下手が第一の問題だ。しかし、世話する／されるの關係に、情緒的問題は不可避である。

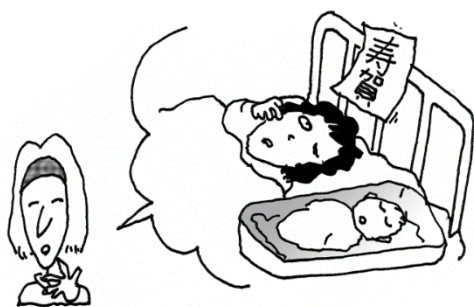
世代間境界の侵犯問題は、日常生活のいろんなところに顔を出す。この問題は想像以上に人の心を侵食してくる。

家族（6） 命名

ものにはそれぞれ名前がある。名があってはじめて、他のものと区別された独立物だと認識される。人も名付けられる。意図する、しないにかかわらず、命名は子どもの将来にまで大きな意味を持ってしまう仕事だ。

寿賀（すが）という名の女子学生に会った。口には出さなかったが、「何とまあ古めかしい・・・」と心の中で思った。最近の名付けは、きらきらネームなどと称して、大人になって困るのではな

いかと思ってしまうほど、悪のり気味に自由だ。名前ははっきり時代の写し鏡である。だから今どきの十九歳に寿賀は驚きだった。



「対人援助技術演習」の授業で、家族が何かを決定することをテーマの面接実習を行うため、ボランティアを募ったところ、彼女が志願して出てきた。定石通り名付けプロセスの話を聞いた。

「お母さんが病院で私を産んで気が付いたら、おばあちゃんの決めたこの名前が枕元に半紙に書いて張ってあったんです」

いったい、いつの時代の話だ…と思った。更に聞くと、両親は彼女がまだ幼い頃に離婚していた。離婚の原因は嫁姑の対立。それを夫が上手くさばけず、祖母に牛耳られてしまったことによるらしい。そして両親とも再婚はしなかったといい、「今も、弟と私は父によく会います」といった。



寿賀

この始まりが彼女の名付けだった。両親にとって子どもの名付けは、どんな名前かだけではなく、誰が付けるかも重要である。その時のルールが家族の基本スタイルになりやすい。なぜなら、名付けはそれくらい精神的に重要なことだからである。

彼女の名前が即、離婚原因になったわけではない。三年後には弟も誕生している。そして弟の名付けには、祖母の介入を断り、母親が自分で付けた。しかしあれ以来、なにかにつけ家族の重大な局面では必ず祖母の意見が影響力を持つことになっていた。それを受け入れ難い母と、「臨機応変になんとか・・・」と言いつつまるめこまれる父。結局、離婚にいたることになるパターンは、寿賀の名付けの段階で既に明らかになっていたことになる。

最後は、「お義母さんをとるのか、私をとるのか決めてください！」と母は迫ったらしい。それでも父は「何とか上手く、仲良くやってくれ・・・」と頼むばかりだった。そして母は二人の子を連れて家を出た。

名付けだけではない、家族の「決定」（これは後にパワーのところでも詳しく述べる）に関しては、誰の関与を許すか、許さないかが大きなテーマになる。

名付けへの介入、これが世代間境界を越えた侵入であることを自覚しておくことは大切だ。名前を話し合うのは両親である。もちろん、夫婦で話し合っ、祖母に名前を付けてもらう事になるのは全く問題ない。

問題はそれがどのように決められたかである。ここに世代間境界侵犯のエピソードがしばしば見られる。どんな名前が一番良いのかに拘りすぎると、他力本願に流れていく。誰が名付けるかが大切だと覚悟できれば、自ずと方針は出るのだが。



三角関係

世代間境界が問題として多く現れるのは、親子間に三角関係の緊張が出現している場合である。夫婦関係に対立や葛藤が多いと、母親はしばしば子どもを自分の側に取り込もうとする。子どもはどちらか一方に属したいとは思っていないので苦しむこともしばしばである。

父親のDVのように問題がはっきりしている場合、母子が結束する理由が明らかなので、そう問題にはならない。世代間境界が問題になるのは、あからさまではない夫婦葛藤状況における親子世代の関係である。

夫婦の葛藤は基本的にカップル間の問題だ。内容がどうこういうのではなく、二人で解決に取り組むべきテーマであることは明らかだ。そこをきちんと理解していないと、子どもを味方につけようとあれこれ策略を巡らし、それに対抗するエネルギーを相手の中に昂じさせる。

そんな事態の中に、援助職者が取り込まれて、更なる援軍になっても、解決の道は遠い。

母子密着

必ずと言うことはないが、長期化した単身赴任一家における日常の様々な問題解決には、知らず知らずのうちに世代間境界破りによる新たな問題が生じやすい。

父親の不在状況で家族員の誰かに問題が起きたとしよう。それが子どもでも祖父母世代のことでもかまわない。当然、緊急対応のための対策がとられることになるが、解決の担い手として不在者はしばしばメンバーから外れる。あるいは、不在を理由に逃れようとする場合もある。

以前、小学生の不登校児童の相談を受けていた時のことだ。面接には母親と兄、そして本人が来ていた。「お父さんは？」と聞くと、遠方に長期の単身赴任で、正月くらいにしか戻らないと言う。そのため、母親は兄に何でも相談しているようだった。

普通なら両親で相談するべきだろうと思われることが皆、母と兄の間で話し合われていた。「このことをお父さんはどうおっしゃっていますか？」と質問を挟んでも、「主人は任せると言います」と、父親は問題解決のための協議にも参加していないと母親がいう。

そこで私は、「この問題は、どうしたらいいかを思案するのではなく、誰が考えるべきかを整理した方が良いと思います」とコメントした。

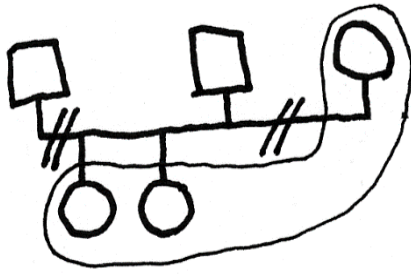
そして「お兄ちゃんは、親ではありません。子どもが親代わりになって解決努力をしているのは感心しません。上手くいったとしても、ずっと父親代わりをさせるわけにはゆきませんし、上手くいかなければ何の利益もありません。一方、両親二人で努力されたら、たとえ上手くいかなかったとしても、次の対策に向けて、失敗の持つ意味は少なくないでしょう」

そしてこの後、遠方の父親を面接に呼ぶ提案をした。母親は最初、それは難しいと思うという意見だった。

そして「せめて一度だけでも・・・」と誘い続けていると、父親が面接に現れた。その後は、出張などの日程に合わせた面接設定をすることで毎回参加し、家族関係は急速に変化していった。

家族（7）母の選択、娘の選択

ある母子世帯育ちの女性の話だ。彼女の両親は二人の娘を授かった後、離婚した。二人を引き取った母は再婚、しかしその結婚も上手くいかず再び離婚。母子生活も十年以上になる。



母親はこういう家族歴ゆえだろう、人一倍子ども達には厳しいしつけをした。母子所帯だからといって、世間から後ろ指をさされたりすることを殊のほか警戒した。

長女は母の期待に応えて、とてもがんばり屋さんに育った。しかし次女は姉と同じようにはできなかった。高校時代からあれこれ問題を起こし、母親はその対応に苦しんだ。姉も母親の代理として動員された。時には母に代わっ

て妹に説教もした。

月日が経ち、今、姉は母親との関係に、小さなこだわりを抱えている。それは、妹が高校中退後、美容師として落ち着くまで、あれこれさまようプロセスで、いつしか母ととても良い関係になっていることだ。

彼女は母親の期待に添うよう努力をし続け、結果も手に入れた。しかし、どう考えても母親は妹と近い。

最近、自分の生真面目さからか、少々疎ましがられている気さえする。母親の片腕として過ごした結果、母親にとっても口うるさそうな娘になってしまった。

彼女は今、自分がこんな風になったのは、期待に応え続けた結果じゃないかと言いたい気持ちでいっぱいだ。そして自分ももっと、身勝手な思春期を過ごしたかったと振り返る。ここで問題になっているのも世代間境界の引き損ねである。



今、母親と妹の関係が、姉は羨ましくてならない。でも、もうそんな齢でもないとも思っている。姉妹としてお互いの理解を深める必要の方が大きい事も理解している。（このテーマは後述する同胞サブシステムの問題でもある）。

一番具合の悪いのは、この段階で姉妹が母親の取り合いをしてしまうことだ。そんなことになった家族に、兄弟姉妹の争いが起きている。これを整理して、今後の適正な家族のつながりを構成する目安になるのが、世代間境界の考え方である。

まとめ

言うまでもないことだが、「境界」の問題は分離独立、自立と関わった話だ。だから境界線を引くことと、関係を絶つこととは同じではない。

依存の場から、まずは自立が実現され、その後に親密な関係の家族としての再会がある。再会時には独立した個人同士の関係が獲得されている。その後、親世代との間には、体力や経済力などの逆転も生まれるだろう。

このように保護される者から、立場の逆転を実現するためには、一度、そこから離れるのが賢明である。子ども世代が自立を実感できるのが、空間的、経済的分離であることは多い。